

続文化は、
今に生きる

白玉の 齒にしみとほる 秋の
夜の 酒はしづかに 飲むべかり
けり 若山牧水
白秋の頃は、弥生人が愛した
白について。

金属なら白銀にかがやく、銀

白秋の頃

深澤芳樹

や鉄、それと錫の割合がとても
高い白銅を、指輪や腕輪にした。

動物性の骨質なら、海でひろ

つた貝、それに山の鹿の角や骨
猪の牙。貝は、穴をあけて腕輪

にしたり、小玉にして数珠玉に

したり。鹿角は、髪飾り、ペンダ
ント、指輪に、細い骨は、簪に、

そこに縄文由来の流水文や大陸

由来の面鋸歯文を精緻に刻んだ。

猪の牙は、一つ組み合わせて、腕
輪にと。

これとは別に、わたくしには
こころひかれる貝製品がある。

それは、鹿児島県種子島広田遺

跡で見た貝匙だ。考古学者石堂
和博さんによれば、弥生時代か

ら古墳時代にかけて広田人は貝

匙を、すべて夜光貝で作っている。

夜光貝は、奄美大島以南に生息

する巻貝で、身も美味いが、貝

殻は真珠層まで磨くと、オパー
ルのように煌めく。だが、出土し
た貝匙は、その輝きを失っていた。

さらに奄美大島や沖縄など
南海が交易圏にはいると、ゴホ
ウラ、イモガイ、オオツタノハと
いった貝が、日本列島にはいつて
くる。それは、乳白色で硬く大
きく、それでいて滑らかな見事
な腕飾りになる。これらを、古
墳時代前期の首長たちは、硬質
で緑色があった美しい碧玉に材
質転換して、鍛形石、石釧、
車輪石にして、墓に副葬した。よ
ほど魅力的だったにちがいない。

弥生時代併行期から中世にわ
たる奄美大島小湊ワガネク遺
跡で、夜光貝の製作跡がみつかつ
た。ここで貝匙などを作っていた。
奄美大島近辺の夜光貝も、本土
などに送られ、螺鈿の材になつ

たのだろう。正倉院宝物の螺鈿
は、そのほとんどが夜光貝だった。
翡翠の緑色について、以前この
新聞に書いたことがある。翡翠
は、ヒスイ輝石で、おもな成分は、
ケイ素アルミニウム、ナトリウ
ムで白色だが、鉄、チタン、クロ
ムなどが混じると発色する。赤
色、紫色、黒色もあるが、縄文
以来、緑色を選んだ。だが、
特に白色を好んだ弥生人は翡翠
の白色部分に、緑色部分の単な
る背景ではなく、きつ
と重要な意味をあた
えていたにちがいない。

「魏志倭人伝」には、
倭国の特産に真珠をあ
げている。真珠は、前
漢代に南越国を治めた
文帝趙昧の墓に、大切
に副葬してあった。『三
国志演義』で董卓が
呂布を味方に引きいれ
るため贈ったものに、
駿馬、黄金、玉の帯、
それに真珠があった。

では、この白珠とはなにか。
発掘中の京都府奈良岡遺跡で
弥生中期の工房跡を訪ねたこと
がある。水晶を玉にするのに、
弥生人は白濁部分を捨てていた。
この目撃情報は考古学者米田克
彦さんが、水晶の玉は白濁部分
を避け、透明部分を選んでいた
とする教示に一致する。これは、
奈良県飛鳥池遺跡でガラス原料
として白濁部分も積極的に利用
したのとは異なる。この事実は、
透明な水晶部分を透き通った玉
に仕上げる研磨技術が、当時の
日本列島にあったことを物語る。

「白珠」は、考古学者野島永さ
ん『初期国家の形成過程の鉄器
文化』雄山閣の指摘どおり、透
明な水晶製小玉類だったのでは
ないか。もしそうであるなら、
魏の皇帝に贈った白珠は、曇りが
一切ない、それこそ完璧なまで
に澄んだ玉であつたにちがいない。
白露や、茨の刺にひとつつゝ、
また「魏志倭人伝」に、
「白珠五千孔」を、卑弥

長谷川等伯画「松林図屏風」から（深澤芳樹写）



また「魏志倭人伝」に、
「白珠五千孔」を、卑弥

呼の後継者壹與が魏の皇帝に贈
った、とある。
（日本考古学）

与謝蕪村